

## 思春期女子登校拒否の治療事例

——長い眠りの時を越えて——

生 田 純 子

### § はじめに

学校へ行けない子供たちは増加の一途をたどっている。文部省の1987年に発表した「児童生徒の問題行動の実態と文部省の施策について」によれば、登校拒否とみられる長期欠席の小学生は0.04%、中学生は0.49%であり、この11年間に4倍増となっていると報告されている。

また、名古屋市教育センターの1987年の調査では、神経症的登校拒否の出現率は小学生では0.10%、中学生では0.36%となっている。

どこの相談機関でもその治療や対応に追われているのが現状である。しかし、登校拒否という言葉からして、かなりあいまいな表現であり、単に「登校できない」という状態をみても、中身は様々である。上記の調査の折にも、親と担任とでは同じ欠席に対する受取り方が異なるなど、出現率そのものにもややあいまい性をとどめている。

ここにあげた事例は、思春期登校拒否と思われる少女の発症から立直りの過程を、本人に対するカウンセリングおよび遊戯治療、親に対するカウンセリングを通して述べるものである。またその過程にも関連する、中学生の登校拒否の持つ問題と、立ち直ることの意味についても考察したい。

### § 思春期登校拒否の特徴

#### 1 登校拒否とは

ここでいう登校拒否とは、登校刺激に対して

独特の拒否反応を示し、欠席していることに強くこだわり、その成因が神経症的メカニズムによって説明できるような、心因性の学校欠席ととらえる。

登校拒否の分類には、欠席の形態による分類、発症の経過による分類、症状形成要因による分類、治療からみた分類などが考えられているが、ここでは発達課題論の立場をとる。

つまり、子供が大人になるまでの各々の成長段階で、直面し克服しなければならない様々な発達課題につまずき、心因性の学校欠席という表現形態をとり、その心のつまずきから立ち直るまでの不適応状態を登校拒否と称する。

要するに、登校拒否という現象は、たしかに一時的には心理的な挫折を体験することではあるが、しかし、長期的にみれば、そこからの立ち直りの過程で、「巣立ちのつまずき」を克服し、自己形成にむけて発達課題解決への営みがなされていくものである。

#### 2 思春期の特徴

思春期の発達課題は「両親——特に母親——からの分離と個としての自立、自己概念の確立、同性同年輩の友人との親密な交流を通しての他者愛の能力を発達させること、異性愛を可能にするための性的同一性の基礎づくり」といった点であると考えられる。女性の思春期について、女性自身はどのような体験をしてきたかということについて次に引用してみる（菅 佐和子著「思春期女性の心理療法」）。菅はノーマルと思われる20歳の女性に、自分にとって思春期はどのようなものであったかを回想してもらった結

果をまとめている。〈(1)~(7)〉

(1) 思春期の心模様

情緒が不安定で、喜怒哀楽が激しく、時には孤独感にさいなまれ、寂しさのあまり落込んでしまう。このような傾向は、思春期の心模様として、かなり基本的なもののようである。

(2) 自立をめぐる葛藤

親に対する激しい嫌悪や不満が生じて反抗したという報告は数多い。親から離れて自立したいという欲求と、まだまだ親に依存している面との間での葛藤が生じ、どうしようもないいらだちが沸き起こってくるのであろう。

特に、父親が「理由もなく」嫌われ、敬遠されることがあるのも、この時期の大きな特徴の一つであると言えるであろう。

後年になると、あの頃の反抗は、所詮八つ当たりであり、親にも随分迷惑をかけてしまったという反省も出てくるようである。従って、この時期の反抗は、発達に伴う必然的な現象なのであろう。

(3) 自分を意識する

思春期の特徴の一つは、この自己意識の高まりである。あれこれと思い悩むため、どうしても自己評価が低下し、劣等感にとらわれたりすることもある。またその逆に、非現実的な理想化された自己像を抱く場合もある。自己意識の高まりは当然、他者のまなざしへのこだわりと表裏をなしている。他者の目に自己の姿がどのように映っているのかが、気になって仕方がないわけである。

特に、女性としての身体に対するこだわりは、相当なものであろう。「肉体的に成長して、どんどん女らしくなっていく」ことへの気恥ずかしさと戸惑い、その反面のひそやかな期待と喜び、といった感情は当然、この年頃の女性の多くに共通するものと言えよう。

(4) 対他者関係

思春期女性の対他者関係のなかでも最も重要なのは、同性同年輩の友人との関係で

はなかりうか。この年輩の女の子は、仲間と身を寄せあっていなければ不安でいたたまれないことが多いようである。しかも、その仲間うちで、お互いに相手の感情をあれこれと推し量り、一喜一憂していることが多い。友人がいないとやっていけないものの、友人と一緒にだともた気を使う、という環境のなかで神経をすり減らしていることも希ではない。それでも「同じ年の友人で、心から打ちとけられる相手」を求めるのが、自然な現象なのであろう。

(5) 異性への関心

同性同年輩の友人を求める他に、思春期になると異性への関心が出てくる。それは、本人の心の内部で密やかな思いであることも多いが、具体的な行動となって現れることも希ではない。(具体的な行動、性的な体験などについて言及した報告もあったが、あくまでも本人の心のなかの動きにのみ注目した。)

(6) 学校生活をめぐって

まず、現在の受験体制のもとでの管理主義的教育と、教師に対する反発や批判も、ある程度は報告されている。しかし他のテーマに比べて、その頻度は案外少ないように感じられた。当事者にとっては、そのような大きい状況自体は、はっきりと対象化して見ることのできないものであり、意識されないままであることが多いのかもしれない。

それに対して、「いじめにあった」という報告は思いの外多かった。何はともあれ、かなりの数の若者が、このような苛酷な体験を強いられているということは、決して見過ごされてはならないであろう。

また、優等生の挫折というものも、不適応の原因としてよく知られたことである。しかし、その体験のなかから自力で立ち上げられる人と、その事実を受け入れられずに現実から逃避せざるを得ない人との間には、どこかに差異があるのであろうと考えられる。

(7) 自分とは何か

これは根源的、実存的な問題である。心

理療法によってこのような問の解答が見付かるかどうかは分からないが、少なくとも、このような問をかかえた思春期の人を外側からそっと支えることは、心理療法家の重要な仕事の一つであると言えるであろう。

### 3 思春期に始まる登校拒否の特徴

前節で述べた思春期の様々な特徴は、誰にも認められるものであって、登校拒否の子供にだけみられるものではない。しかし、この時期をうまく乗り越えて現在の健全な自分たらしめる人と、深い挫折感におそわれて身動きのとれない苦しみに見舞われる人に別れるのは、思春期までの発達課題が解決されているか否かの違いによる。

エリクソン(1959)は乳児期の子供では、基本的信頼感が、青年期には自我同一性が、それぞれ確立されなければならないという。これを登校拒否にあてはめてみると、たとえば、思春期の急性登校拒否(小泉のいう優等生の息切れ型)は、思春期の発達課題が解決できずに、子供の人格が一時的に統合を失って生じたものと見ることができる。

思春期登校拒否には不安を中心とした神経症的な登校拒否が多くみられ、その難治性が指摘されている。この背景には、長い閉じ籠もりによる治療的援助の拒否、治療意欲の弱さ、時間的展望の欠如、多彩な症状の出現など、学童期の登校拒否にはあまりみられない特色がある。

思春期登校拒否の治療についていえば、「学校復帰」にポイントをおいた見方では、子供との接触ができなくなることが分かってきた。

中学生以上では2~3年、またはそれ以上の時間をかけて彼等に接触していく事例が少なくないのに、高校生では、約三か月間学校を休むと留年とされる。また、留年を2回も繰り返すと、退学を余儀なくされる場合が多いので、学校復帰をあせる気持ちが周囲に強くなりがちである。

援助期間が長いこと以外に、思春期登校拒否の子供では、学校復帰を前面に出した援助には強い抵抗が起こるのが普通である。これは、登校拒否の始めに強くみられる。それだけではなく、彼等は家族以外の人との接触そのものに強い

抵抗を示し、専門家でも接触できるようになるのに半年以上もかかることが少なくない。

## § 登校拒否からの立ち直り

### 1 登校拒否が治るとは

子供が登校拒否になると、親も教師も一日も早い学校復帰を望み、色々と努力する。特に初期にはこの傾向が強い。そして、学校に復帰すると、関係者は「治った」と安心することが多い。この場合、「登校拒否から立ち直る」とは学校復帰することである。しかし思春期登校拒否の援助経験から、前節での述べたように子供自身の学校への強い抵抗や、家族以外の人との接触を嫌う長い閉じ籠もりなどを考えると、登校拒否の立ち直りを「学校復帰」に置くことは合理的ではないことが明らかになってきた。発達課題につまずいたとの考えからすると、「学校へのとらわれ」からの解放を出発点として、その子供の人格の発達を進めるところに援助のポイントを置くべきである。

### 2 登校拒否の治療

多くの治療施設では、親や本人にはカウンセリングを、また年少の子供にはプレイ・セラピーを行っている。

最近の登校拒否に対する考え方に、登校刺激はマイナスであるから一切加えず、本人が自主的に登校し始めるのをじっと待つ、といったものがあって、親も学校も登校させる努力をしなくなるといった傾向がある。こうした考えの中には、学校が悪いのだから学校を直せばよいという主張や、子供には問題がないといった理解のしかたを合理化するような理屈がある。「何もしないで放っておけばよい」という考えは、その当座には親も気楽になるので受け入れられやすい。

しかし、親がプレッシャーをかけすぎているのだから、それを取り除けばそれでよいというものではない。子供本人の適応力とか、問題解決能力が社会生活をする上では不可欠であるから、それを育てる努力をしなければ、真の意味の立ち直りはないと考える。

思春期に必要な能力は、思春期を遙かに過ぎてしまってからでは身につけにくい。またそれからではその努力も何倍も必要となる。

従って、筆者はたとえ本人が閉じ籠もっていても、親を通じてのカウンセリングを続けて、やがては治療に本人が現れることを期待したり、些細な変化も見逃さず、適宜働きかけるようにしている。その際、刺激はあくまでも本人に受け入れられるもののみとし、本人の意思を尊重して、慎重に進めている。

### 3 思春期登校拒否の治療の問題

中学生の場合、発症から長い時間を経て、最初の進級の問題が出るころは、大抵の親や本人は進級を希望する。「皆と一緒に二年になりたい」「一緒に修学旅行に行きたい」「一年遅れたら絶対に行かない」などという本人の言葉によってほぼ進級が決められているようである。高校と違って、留年の制度が明確でないため、学校長が本人や親の意思を尊重することになる。

しかし、これが三年を終える段階になると深刻である。卒業はさせてもらっても、就職もできないし進学もできないことになってしまうからである。縁故で就職する場合を除いては、事情を承知で採用する職場は少ない。また親が「今すぐ働かせる気はない」という気持ちを持っていることが多いため、どこかへ進学することになる。治療者側からみれば、これだけ学校というところを拒否していたのにすぐ進学して新たな学校に適應するとは考えにくい。しかし、筆者の経験では、卒業させてもらった途端に、定時制高校を受験したいと申し出て、周囲を啞然とさせた例もある。彼などは、「もう絶対に学校と名のつくところへは行かない」と宣言していたのである。

卒業期が近付くと、親も本人もかなり動揺をみせ、三学期に出てくれば卒業させてもらえると聞けば、無理しても登校しようと動き出すことが多い。これは本人の意思決定を促すうえでは好機ではあるが、一時的に登校日数を積んで、辛うじて進学した子の場合、高い入学金その他を払って入学しても、一ヶ月も続かずまた欠席し、すぐ休学または退学となる例も少なくない。

登校拒否をしていた中学生が一年ぐらいの欠席で学校復帰し、不安やあせりもなくなった時点で高校進学する場合は別として、学習の遅れも含めて問題は非常に多い。平井の言うように、何年かかっても治すつもりで留年させるべきだ、という考えにそってうまくいった例は長い経験でもほんの二例にすぎない。出席日数も不足のまま卒業させて欲しいとあって、卒業して就職もせず、学校へも行けず、何年かしてまた別の相談機関で社会不適応についての相談をすることになる子供も多い。

また、各種学校、専門学校へ進学し、見違えるように生き生きと通学した例もあるが、それは、進学した学校や仕事先が本人に合っていたと考えるよりも、その進路を本人がどのようにして選択し、親がその本人の気持ちをどう受け入れたか、にかかる比重のほうが大きいと思われる。

学校の教師は、本人が本当に立ち直ったかどうかよりも、学校復帰にこだわり過ぎる、という批判もあるが、学習の遅れが二次的にまた登校拒否を生じる原因を作ること考えたり、義務教育の中の中学校では、安易に留年が許されない事情も理解できるので、一日も早くをさせる学校側の気持ちも分かる。

### 4 立ち直りの兆し

登校拒否の子供が直っていくときはどんなときであろうか。治療の面接を続けていく中で、立ち直りの兆しを適確にとらえて、タイミングのよい周囲への働き掛けがなされることが最良の道と考えている。その意味では梅垣（1982、月刊生徒指導）の指標が参考になる。

梅垣は、登校拒否を巣立ちのつまずきとして位置づけた。つまり登校拒否は、母子共生・父性欠如とともに本人の幼発的依存性が中核をなす巣立ちのつまずきと考えている。そして、中高校生の思春期登校拒否事例の援助過程において、本人のもつ問題解決の発現が局面の打開とその展開に大きく貢献していることを経験している。「登校拒否が直っていく」指標として次のような五つの具体的事項をあげている。

- (1) 新しい進路の選択——自主的な進路の選択ができるような自己解決能力の成長を

はかることが援助の目標であり、復学・退学・就職・それに定時制高校や各種学校への進学など、新しい進路の選択にあたって自主的な決意の示されること。

- (2) 思春期的な生活体験の拡大 —— 一人旅、アルバイト、寮生活など新しい思春期的な生活実践試行が認められること。
- (3) 友人関係の親密化 —— 大人との縦の関係は密につながっているが、友人との横の関係は希薄であり、それがまた拒否の引金にもなっているのであるが、旧友との海水浴や映画鑑賞の機会は親密な友人関係が確立していくことであり、本人の心の支えとなって、登校・学校生活への志向ともなる。
- (4) 日常生活の習慣的課題への取り組み —— 一朝の起床・洗面・歯みがき・入浴・衣服の着替えなど、日常的身近処理ができるようになる。また飼犬の散歩・庭の掃除など発症以前の家事分担が再び手がけられるようになる。
- (5) 自覚症状に対する治療意欲 —— 中核となる学校欠席の問題の他に、辺縁的問題として、「身体症状に関する訴え」や「精神症状に関する訴え」がなされやすい。こうした自覚症状に対する治療意欲が芽生えてくること。

著者も経験的にこの指標を採用していくが、以上の他に学校や教育を受けることへの関心が戻ってくることを上げたい。つまり、同じようにテレビを見ているにしても、教育テレビであるとか、中学生を扱ったドラマ、もっとストレートに登校拒否をあつかった内容にも興味や関心が出てくるなど、ただ単に時間つぶしとしか思われなかったテレビ鑑賞が、内容からみてより教育的になったり、積極的になったりする。また、教科の進度に関心を持ったり学校行事を気にしたりするようになるなどである。

## § 事例

### 1 事例の概要

- ① 主訴：登校拒否（A子 中学一年生）

- ② 家族構成：父—42歳（会社員）  
母—43歳（主婦）  
兄—16歳（高1）  
（年齢は受け付け時）

③ 登校拒否発症までの経過：小学校時代は友人は少なく、自分から求めていく方ではなかった。家で一人で遊ぶおとなしい子であった。中学校では班活動が負担になっていた。何でも班の責任と指導され、できないとかげ口をきかれたとか、部活動が強制的で、必ずどこかに所属しなければならず、それも練習が朝あって、休むと届けなければいけないなど、かなり窮屈であった。班活動のことは、生活指導の先生に頼んで善処してもらはずであった。

1学期末ごろから部活動（水泳）をサボり始めた。11月になって毎朝発熱（37度Cくらい）したので薬をのむ。次に吐き気がして早退するようになった（3回）。朝になるとぐずぐず言い、遅刻して母に送ってもらうこともあった。一日休むと、次の日はあちこちが痛いと訴えて起きないなど体の不調が多くなった。12月1週目は2日の出席、第2週は全欠席となってしまった。成績は中の下。あまり勉強しないタイプ。

④ 現在の状況：学校へは行くつもりであり、準備をしたり朝起きて制服を着たりする。しかし、いざとなると頭痛や腹痛が起きて出掛けられない。行けない理由を周囲の人のせいにして、「もう学校へ行ってあげない」などと言いがかりをつける。

⑤ 来談経路：父の兄が著者の所属する名古屋教育センターを知っていて紹介してきた。

⑥ 相談の経路：毎回1時間、母とA子は別の治療者。中1の12月12日から中3の3月13日まで、母親74回、A子36回の後母親2回、A子1回の報告を得ている。母親の面接は筆者が、A子の面接は男性の治療者が行い筆者がスーパーバイズした。

## 2 面接の経過

第I期 インテーク（12/12）～第18回〈A子6回〉（中2の6/14）

—— 混乱と母親への甘え ——

初回のみ両親で来談する。大柄でほとんどしゃべらない父親と、ぼくとつな感じの母親は

A子の状態を問われるままに答えた。

A子の入学と入れ替わりに卒業した兄が成績も良く、部活動でもスター的存在であり、校内には知らない先生はいないほどであったという。その妹として、親は何の心配もせずにA子を中学校へ入れた。部活動のことも兄にとっては当たり前で、なぜA子がやれないのか不思議でさえあった。「同じように育てたつもりでもやはり少し甘やかしたのでしょうか」と戸惑いは隠せなかった。

欠席が始まったころ、「どうしても犬が飼いたい、飼ってくれば登校する」というので、柴犬を買った。一人で世話をすることはできず、母親が散歩に連れだすこととなった。A子がついてくると犬と一緒に小便や大便をしたがった。もの蔭などでさせながら、まるで赤ちゃんのようだと感じた、と母親は言っている。また2月になると母親と一緒にふとんで寝たがった。ふとんに入ると母親の体を触ったりくすぐったりするので、母親はあきれまわい、情無くなる。A子は「私より先に眠ってはいけない」と無理やり母親を起こしたり、夕食後くつろいでいると膝の上に座ってテレビを見たりする。3月になってやっと隣に敷いたふとんで寝るようになった。しかし、手で母親の襟首をつかんだままであった。4月中頃、母親の実家で法事がありA子も行くが、すぐに「お家に帰ろう」と連発するので困ってしまったという。

母親の第6回の面接の日までA子は来れない。自分は登校拒否ではない、病気だと思っているから相談には行かなくてもいい、というのがA子の言い分であった。12月の終わりまでは欠席。終業式の後、担任が通知表を持ってきてくれた。

三学期も2月の始めころ1時間ずつ3日登校し、3月のはじめのテストとその前日に1時間ずつ出席するのみ。2年生も4月に1時間出席する。クラスの友達と話をかわすことができないようである。

明日は行くと言いながら出掛けられないとすっかりしょげてしまい、ちょっとしたことで怒りだしたり、泣き出したりして手がつかなくなる。言うことはめちゃくちゃで荒れまくっ

ていた。

仲良しの友人が毎朝寄ってくれたり、電話を掛けてくれたりする。担任も連絡をこまめにとってくれたり、部活動もA子の希望のところへ変えてくれたりした。しかし、A子はその日の機嫌次第で、担任をうっとうしがったり、面白くないと怒ったりした。

母親はA子の気持ちがよく理解できるものの、どうしてよいのやら分からないといったところで、見守ってやるしかできないという。また、A子の激しい甘えも受け入れてはいるものの、いつまでと考えると不安になっていた。そうした母親の気持ちを面接で支えていくようにした。また、父親の話はまったく出て来ないし、兄もA子にどのような関わりをしているのか把握し難かった。ただ、兄が風邪で欠席したときに、A子と母親のやりとりを見て「お母さんも大変だねえ」と同情していたようである。

母親としては、兄が全く手の掛からない良い子であったので、A子も同じようにしたつもりだったのに、どうしてこんなことになったのか合点がいかない、という感情が拭えなかった。その兄と比較する気持ちは無かったし、女の子だから成績は特に良くなくてもいいと思っていた、という。しかし中学校では兄の栄光が、A子に優秀な兄と同じでありたいという願望を持たせることとなり、能力的には追い付けそうもなかったと感じたとき不安となつてのしかかってきたと考えられる。

A子の自我は肥大したままであり、自分ではやろうと思えばすぐ何でもやれるように豪語する反面、出来ない現実をつきつけられるとしょんぼりして、退行していったと思われる。

A子自身はこの間6回来談するが、治療者によくしゃべり、箱庭を作る(1~3回)。しかし、次の回には「面接が退屈だから」と言って来ない。独りでしゃべって防衛していたのだと分かる。

4月の終わりごろからは人目をはばかって外出できなくなり、来談もできない。家ではA子は我がままを言い、なんでも人のせいにする。

「みんなが~したから学校へ行ってあげない」  
「兄さんが~と言ったから、明日から行くつも

りだったがやめた」という具合である。その内、母親も過保護であったと気付く。服の出し入れ、ふとんの上げ下げ、部屋の掃除など全部やっていたのである。「やってはいけなかったでしょうか」と不審顔であった。A子は小さい時から何かと文句が多く手がかかったが、いずれ兄のようになるような気がしていたため、ずるずるとA子の言うままにしていたと気付く。

**第Ⅱ期 第19回〈A子7回〉(中2の6/23)  
～第26回〈A子12回〉(9/17)**

——やや落ち着いた日常——

この期は母子での来談ができた。日常生活も、登校できないこと以外はかなり落ち着いてきた。学校から担任や、若い副担任が来訪してくれると会って話ができる。そこで約束しても守れない。しかし、先生の前では何も言えなくなるという。お盆には父親や母親の実家へ行き、同じ年の従姉妹と遊んできたが、泊まることはできない。直ぐに家に帰りたくなってしまう。

夏休み前に学校のキャンプに行けなかった代わりに、両親に京都へ連れて行ってもらう。出掛けるまでが大騒ぎであったが、出てしまえば落ち着いた。しかし、京都で修学旅行の高校生に出会った途端に不機嫌になり、二条城では入ることができない。以前一家で行ったときは、観光バスでせわしかったから、今度はゆっくり見るという方針であったが、駄目になった。このことをA子は「中学生が学校を休んで遊んでいる」と言われると嫌だからという。従姉妹のように休んでいることを知っている人には平気だということである。

この時期は新聞やテレビの情報で、戦争や争い、殺人事件などを見聞きすると不安になり、胸がドキドキする。一日も早く戦争が終らないかとか、人通りの少ない道路を行くときに、変な人がいないか気になって、思わず走ってしまったり、雷が怖くて天気予報を苦しんだりする。A子自身も以前は平気だったのに変だと言っている。またちょっとしたことにこだわったり、深刻に悩んでどんどん落ち込んだりする。自分でも顔色が悪くなるのが分かるという。

母親から家での話題が中学生らしくなったと思う、以前の赤ちゃんのようだったときは兄の

話す内容が難しく分らないと文句を言うので、兄に頼んでレベルを下げてもらっていた。それが普通になったし、「このごろA子がかわいくなったね」と兄も気付いた。その兄も最近母親に反抗しだした。今までのように素直に話が聞けず、反発したり怒ったりする。文句があれば言ったらいいというと、スリッパを投げたり、机を叩いたりして発散している。反抗期がなかったからかと思っているという。

学校のことは、以前のようにやってみて駄目だったというのではなく、自分で行きたいのに行けないのだ、と分かってきた。

9月になると、やっと自分のベッドで寝るようになった。また、少し離れた所で生け花を習うことにした。グループの他のメンバーは高校生5人である。母親の車で送り迎えしてもらったことである。何かやりたいというA子の希望をいれ、結構楽しいという。

学校へは行けないながらもA子にはこのままではいけない、何とかしたいと前向きの気持ちも出てきている。しかし、まだなぜ行けなくなったのかということまでは考えられていない。母親もA子の扱いに馴れてきて、以前のようにオロオロするだけではなく、そっとしておいたり、自分で考えるように励ましたり、時には突き放したりできるようになってきた。

**第Ⅲ期 第27回(中2の9/24)～第44回(中2の3/23)**

——心理的な成長と閉じ籠もり——

この期A子は来談できない。1度母親と同席し、A子の治療者も加わって折紙をした。

この半年間、A子は毎日のように「明日からは」「来月からは」「三学期からは」と人にも自分にも言い続けてきた。しかし、結局は12月に1回母親と一緒に校長室へ行ったのみである。センターへ来れない理由を「先生らしい人に会うのは嫌」としている。しかし若い学校の担任や副担任、養護の先生などとは話ができることもあった。登校の約束をさせられると分かっている、会えることが多かったのに、この期では面接を拒否したり、隠れたりした。その理由は「嫌いだからではなくて、恥ずかしいから」と言っている。校長は気さくで飾らないタイプ

の人で抵抗は少ないが、教頭は権威主義的な雰囲気のあるタイプの人とみえて、A子は最後まで嫌う。A子は「中年の男の人は嫌い」とはっきり述べている。思春期の女性らしい感覚でそれ自体は容認できるものの、A子の治療者もそれにあてはまるので、嫌われたものようであった。

家の中でA子は手芸をしたり、番組を選んでテレビを見たり、それなりに活動して過ごしていた。朝もきちんと起きて、生活の乱れも少ない。学習の用意は自分で整えて、勉強も思いつくとよくやっていた。しかし、毎日とか定期的という訳にはいかず、かなり気候なやり方であった。

この頃「西部警察」というテレビ・ドラマに夢中になって、野球などには興味がないとか、ホーム・ドラマをつまらないとか言っては家族にわざと反発していることもあった。10月中旬、イライラすると言って当り散らしていた時、兄に「イライラするのはA子だけではない。A子を見ているとこっちの方がイライラする。」と文句を言われて、わんわんと大泣きをした。しかし、概ね兄とも仲よく過ごし、話も合うようになってきた。

すっかり大人になったように思えると、A子に母親が感想をもらしても、興味がないような反応であったという。「元気もよいし顔色もよいし、学校へは何時出ていってもおかしくないように思える。今はきっかけがないだけだ。」と母親は言うが、A子自身は12月4日、同席で面接した折に「学校へは行こうと思うが、やはりその時になると行けない、学校の建物が嫌とか先生が嫌とかいった気分ではない。中に入っている皆のことを考えると、全く嫌になる。人がどうやって付き合っていくのか、ということに自信が全くなくなった。皆がどう思うかではなくて、自分がどうしたらいいのかが分からなくなったのだ。」と苦しい心境が自分なりに明確になってきていた。

自分以外の家族についての認識もかなり分化してきたようであった。11月23日に両親と父親の洋服を買いに出た。あれこれと選んでみたがはっきりしない父親の態度に、A子は「お父さ

んに決めさせなさいよ」と母親をたしなめ、「自分のことは自分で決めるのだよ」と父親にも言う。驚いて父親が「どちらでもいい」と言うと、「そんなことではやっていかれんよ」と大真面目である。遂に大人二人は大笑いをしてしまった。いつの間にか大人じみた事を言うようになったと本当にびっくりした、という。

犬が病気になり、医者へ連れて行ったり薬を飲ませたりするのを、初めは「犬のくせに薬を飲んで」などと愚痴をこぼしていたが、体が弱ってきて哀れになったのか、熱心に世話をするようになった。犬のほうも、それまで気分が変わりやすいA子を敬遠していたが、これを契機にぐっとなつくようになり、A子も「かわいい」と相手をするようになった。

正月には両親の実家へ行くのを嫌がり、一人で留守番をした。こんなことも初めてであった。

欠席が始まって約一年になったので、教育委員会の人と地元の児童相談所へ行かなくてはならなくなった。そこでも事情を聞かれたり、テスト（心理検査）をうけたりしたが、A子は嫌がることもなく「学校を休んでいるのだから仕方がないわ」と冷静であったし、ここしばらくは学校へ行くとは口に出していなかったのに「学校へ行かなければいけないとは思っているわ」と言っていた。

学習の内容については、「どうせ分るとは思わないから、気にしない」と諦めているようであったが、テレビで給食の場面が出た時には「ああ、学校へ行けたらなあ」と心から嘆息していたという。

この期の母親は、来談する度に沈んだ表情で心中の苦しさを隠せなかった。申し分のなかった兄が反抗を始め、時にはA子と一緒に母親をなじったり、「A子がこうなったのもみなお母さんが甘やかしたせいだ」と問題点を指摘されたりした。割り合い素直な母親はその通りだと思ふ反面、どうしたら良いのか誰も言ってくれない、と面接にも不満や戸惑いが隠せない。そうする内に父親の問題が母親の心の中に表れてきた。父親は働き蜂そのもので、ただ黙々と会社へ行き、あまり愚痴も言わない代わりに子供の問題にもほとんど口を出さない人で



あった。住居は会社の系列の住宅産業が開発し  
売出した大住宅団地にあり、周囲の住人も同じ  
会社の人々である。A子が登校拒否を起こして  
からは、近所で買物をするにも人目を気にする  
時期もあったのに、勤めに行く父親は「仕方が  
ないさ」くらいの反応で、母親の気苦労は理解  
してもらえなかった。少なくとも母親にとって  
A子の問題に関しては孤立無援の状態に耐えね  
ばならなかった。

正月に父方の祖母から、「〇〇（父の名）は  
頼りにならないだろうから、あんたがしっかり  
しておくれ」と言われて、父親のその家族の中  
での地位に気付く。今まで何のトラブルもなく、  
正面切って相談したり決めたりすることもな  
かったので、気付かなかったことであった。考  
えてみれば家の中での父親の発言の重みはな  
かった。母親自身もあまりてきぱきと行動する  
タイプではなかったのに、いつの間にか家庭を  
リードする立場に置かれていたことや、それに  
しては母親にポリシイがなくただなんとなく流  
されてきたことに思い至った。二人の子供から  
その点を追求されているのだと分かって、実  
際にどう行動したらよいのか戸惑ってしまうば  
かりであった。

洋服を買う時のA子の発言は、気持ちの上で  
は母親のものと同じであったが、母親はそれを  
A子にも父親にも口に出して言ったことはな  
かったように思うと述べている。もっと思っ  
ていることを口に出して言えば良いのだと感じた  
という。それまでの母親は、自分の気持ちを言  
うことはなく、～をきなさい、といった命令や  
説教じみた一般論であり、「ありがとう」とか「う  
れしい」なども口には出さなかったと反省して  
いる。

**第Ⅳ期 第45回〈A子14回〉（中3の4/6）  
～第58回〈A子22回〉（8/26）**

——A子自己を語る——

A子は治療者に自然な態度で会話をしている。  
しばらく見ない内に大人びたという印象を  
与える。始めの頃は、A子にとって新鮮であ  
ったお華のお友達や先生のモダンな考え方や話  
題、柔軟な発想が語られた。その内に高校へ自  
分も行きたい、けどもう駄目だというあきら

めの気持ちも出てくる。

犬の世話も犬の表情を見ながらできるなど、  
周囲への細かい気配りができるようになったと  
感じられるようになった。

登校拒否を始めたころのこととして、最初か  
ら教科の進度のペースが速くてついていけない  
と感じ始めたこと、不思議に気力がなくなって、  
やろうとしても力が抜けてしまったこと、家に  
帰ると母に「勉強！」と言われてどっと疲れが  
出てしまったこと、夜寝る時だけ解放された気  
分になったことなど。

欠席して先生や友達から電話が掛かってく  
ると、嫌だというのではなくて「どうしよう」と  
いう気持ちで頭が一杯になってしまっていた。

「相談に来るのは始めは堅苦しく感じて嫌  
だったけど、今は楽しい。このごろはお母さん  
が変わったと思う。以前はお父さんが落ち込  
んでいると一緒に暗くなっていたのに、このごろ  
はそうではない。話し掛ければ返事が来る」と  
観察も鋭い。

父親に頼んで、日曜日に学校の周りを車で  
回ってもらう。学校が遠い感じがしていたのに、  
少し近くなったように思えてくるという。お盆  
に母親の実家に泊まって従姉妹と遊ぶことが  
できる。昨年とは大違いで皆も大人らしくな  
ったと認めてくれる。

学校からは仲良しの子と同じクラスにな  
ったからと知らせてくれたり、修学旅行に誘  
われたりしたが、友達にもあまり会えない。し  
かし情緒的には安定しており、以前のように荒  
れたりごねたりしなくなった。また卒業でき  
たらということで、学校側から専門学校を紹  
介される。A子はそれでも良いと受け入れている。

**第Ⅴ期 第59回〈A子23回〉（中3の9月）  
～第74回〈A子36回〉（中学卒業まで）**

——登校への必死の努力——

二学期の始業式の後2日ばかりは大張切りで  
登校したが、3日目にはもう駄目になってし  
まった。A子は思ったより先生も学級の雰囲気  
もよかったというのに、やはり続けては行け  
ない。二学期の終わり頃まで、家の中でのイ  
ライラがぶり返す。欠席が始まって2年を経  
過したことになる。母親ももうA子のペース  
に合わせ

ることにしてあせらなくなっていた。ある時はほがらかに、またある時は落ち込んで、相変わらずA子の情緒は不安定であった。しかし、以前のように周囲が自分に気を使ってくれることには気付くことができていた。従って、母親がなぐさめたり、元気づけたりすると、「ありがとう、そういう風にしたいんだけど、やっぱり私はだめね」などと諦めたようなことをよく口にした。「この家は陰気だ」と言った時にも、「私が原因なんだと分かっている」とも言っていた。

欠席が続くので卒業も危うくなってきた。学校からはこまめに、遠足やテスト、保護者会、進路説明会などの連絡が入っていたが、いよいよ進路について意思を表明しなければならない時期が近付いた12月中旬、担任から専門学校(洋裁)の紹介があった。以前の時に調べてあったので、A子はすぐ同意した。A子にとっては行けるのであればどこでもよかったのだが、自分も得意とする科目だったので、うれしかったようであった。

次の日から担任や主任の先生が朝迎えにきてくれるようになった。A子は担任に「文集を作りにおいで」と言われた時にさんざん迷っても決められなかった。担任は「中学校はそういう時に、すぐ決めて行動しなければいけないところだから、それで来れなかったんだね」と言って、A子もうなずいていた。

毎日のように先生も来てくれた。しかしA子はやはり出られなかった。センターに来る日に担任から、「私服でいいからセンターへ行く前に学校へ寄って」と誘われて、やっと学校へ寄ることができた。登校しても教室に入らなくてもいいからと勧められて、やっとぼつぼつと登校できるようになった。初めは校長室であったが、三学期からは学校の相談室へ行き、時には気の合った友達と相談室で話ができるようになった。相談室では自習であったが、かわるがわる先生が立ち寄ってくれていた。卒業式は皆と一緒にではなかったが、学校の校長室で一人だけの式を挙げてもらった。

この期のA子は面接でもありのままの自分を自由に出している。両親のけんかが時々話され

る。そういう時はA子が話し掛けても返事が来ないとか父親の雰囲気で分かるという。また、父親から「お前がこういうふう(登校拒否のこと)になってくれたから良かった」と言われて、「自分は学校を休んでいるのに何が良かったものか」と反発をするものの、何かが変わった、よく家族がよく話し合うようになったと思うとも述べている。

母親の方からは特に父親に対する感情の変化は語られなかったが、A子の必死の登校努力に対して暖かく見守っている様子が、A子を力づけたものと思われる。また、学校まで送って行ったり、学校長や担任に会って次の方針の打合せをするのも、父親がかなりやってくれていた。父親も本気なんだ、とA子も強く感じることもできた。

A子は面接室でじっと座って話をするのではなく、プレイルームで卓球をしながらよくしゃべるのであった。兄とは一緒に音楽会に連れて行ってもらったり、よく話すようになった。特に母親が不在のときにはA子の部屋へ話にきて、母親の悪口を言った。兄は「お母さんは子育てに自信を持っているけど、本当はうまくないんだ」とか「何かにつけて嫌味を言う」と批判するようになっていた。しかし、兄はお経を唱えて心の平静を保っているような所があって、A子は兄はネアカと評している。その兄もA子の卒業が決まるころには浪人が決まっていた。

#### 予後 5年後まで

専門学校はA子の希望と一致していたので、あるいはうまく登校できるのではないかと期待したが、一か月もしないうちにまた休み始めた。同年の生徒との関係というよりも、何事にも自信のないA子は学習での課題を示された場合、すぐ出来ないと引込んでしまう傾向が抜けなかった。洋裁の専門学校は随分理解があり、2年間もほとんど登校していないA子に「中学校のことは深くは問いません」といって、ほっとさせているし、できないことには手をかしてくれて、無理なことはないように気を配ってくれていた。

母親が始めの1か月に2回来談して、欠席の

まま様子を見るということでも中断になった。その後、ずっと休んでいるらしいと中学校から聞いていたが、母親は来談しなかった。

4年後、突然A子から電話をもらって会うことになった。もともと背の高い愛くるしい少女であったが、その時のA子のあまりの変容ぶりに驚いた。「センターの横を電車で通る度に、一度寄ろうと考えてはいたのですがついつい時間が過ぎてしまいました」と話し出した。

これが最後のチャンスと思った専門学校へも行けなくなって、A子はしばらくは荒れていた。浪人した兄も家において、二人は喧嘩ばかりしていた。A子は好きだった手芸や洋裁もやる気なくなり、専門学校へ入ったことも後悔しかけていた。犬と一日中座っていたり、ふとんにもぐっていたりで、もんもんとした毎日であった。兄もその内に家を出て、友達と下宿して予備校に通いだした。一人残されたA子はいつまでもこんなことをして自分の青春も終るのかと思うと涙が止まらなかった。もう一度あの専門学校に賭けてみようと思ひ、今度は少しばかりの悪口や失敗にはくじけない、きっと続けてみせると決心した。

二度目の入学のとき、A子の変わりように学校側は驚いたという。それでもその一年間には何度も自分に初心を忘れぬように言い聞かせる必要があった。ともすればくじけそうな心に鞭打って登校を続けた。

2年・3年を経て上級生となって、自分と同じような問題を持っている下級生に出会うようになったとき、心からその子の気持ちが分かるような気がして、話し相手になったり仕事を手伝ったりして力になることができた。自分もやっと人に自分の登校拒否の経験を話すことができるようになった、と考えると学校やその中の人間関係が面白くてたまらなくなった。以前はあんなに怖がって嫌っていたのに、とおかしいような気持ちである。

4年になったが、あと専攻科へ入って短大卒の資格を取りたい。もう2年間学校へ行くことにしたとA子は20歳の女性らしい笑顔を見せていた。

### 3 考 察

A子の登校拒否の問題を考えると、A子自身の問題、親の持つ問題、兄も含めた親子関係の問題、学校の問題、そして予後について、治療の中から考察してみたい。

#### (1) A子自身の問題

A子は小学校の時は心配することはなにもなかった、とはいうものの成績はあまり良くはなかったし、自分でやれないことを母親や兄に押し付けていたりした。A子の自我が未成熟であると気付かれぬままに中学校に入った。また、欲求不満に耐える力もなかったので、中学校の学習に対して努力することもなく、落ちこぼれてしまった。しかし自分は兄のようになるのだ、という肥大した自己像がいつの間にかできあがっていたので、みじめな現実にはA子のプライドを傷付ける結果となった。第Ⅲ期には外出もできないのに、始めは学校へ行こうと思えばいつでも行けるように言っていたが、次第に現実を認め、行きたくても行けないのだと分かってきた。

第Ⅳ期になると、治療者に登校拒否を始めたころの自分の気持ちを話すことができていた。じっくりと自分を見詰めることが可能になったのであろう。それまでは治療者にも強気の発言をしたり、たまに行った学校で派手に振舞って、担任を驚かせるなど、つっぱることで自己防衛をしていたのであった。

第Ⅴ期では進路を選択するのに自分の意思で決定することができるようになっていた。

A子が第Ⅰ期で示した退行はびっくりするほどであった。母親と寝る、膝に乗る、会話のレベルが下がるなど、経験のない母親にとっては更に不安を増大させるものとなっていた。3歳くらいのレベルであったらどうか。その年齢なら学校へは行けないと母親にも納得できた。

A子には情緒的な混乱が多くみられたが、いずれも病的なものではなく、健康な面が多かったのでその意味では安心であった。

#### (2) 親の問題

A子の父親も母親も中卒である。父親は経済的理由から進学をあきらめて、ある大手の会社のブルーカラーとして働いていた。三交代制の

勤務で仕事にも馴れ、地位も安定し、一戸建ての住宅も手にいれることができていた。母親も中卒であるのは経済的な理由というよりは、地方の出身で高校に通うのが困難であった、という理由の方が大きい、しかし、近所の洋裁の先生について学び、自分の物くらは縫える腕は持っていた。

母親は都会的なセンスには欠けるが、優しさのある母性的な人であった。ただし子供を育てることについて、あまりにも行き当たりばったりであったと後に気付いてはいる。A子を兄に比べて甘やかした理由は、女の子は結婚していくので、自立していくことを考えるよりも、人に好かれる可愛い子にしたいという父親の方針に、母親が盲目的に従っていたため、A子は兄よりずっと我がままに育った。

母親はA子にとって良いということなら、とA子を車に乗せて学校のまわりを走ったり、生け花の先生へ送り迎えしたり、中3になると、母親の習っている洋裁のグループへA子を連れて行ったりしている。それは、近所の人達の陰口やお節介にもめげず、A子を守っていたという印象であった。面接室でみる母親はそうした苦しさを淡々とした口調で表現していた。むしろもっと生き生きとした感情の表出があってもよいのに、と感じた。常に自分の気持ちを抑圧して家族に尽すという古風な女性のイメージであった。

父親は真面目一方の人で趣味もなく、子供との会話も不器用であって、どちらかというとなりの子とは相手ができて、女の子であるA子とは母親を介してしか話のできない人であった。父親自身も自分の問題を自己決定できないのは、前に述べた通りであるが、A子が卒業を控えて苦悩しているときには、この父親らしく黙って学校へ送って行ったり、先生に会って方針を決定できるようになっていた。

母親の治療を通して父親も父性を取戻していったと思われる。

### (3) 親子関係の問題

両親が中卒であるので、子供を大学へやりたいと思うのは世の常である。A子の両親もその例にもれない。両親の期待を一身にうけた兄は、

その期待に立派に答えていた。兄は勉強を強いらなくても、自分から進んで取り組んでくれたので、なにも心配しなかった、という。それまで兄は両親の期待に応じて良い評価を受けることに生き甲斐があったと思われる。しかし、A子は勉強が嫌いとはねつける上に、我がままで手がつかない面も早くからみられた。父親が可愛い子に育てば成績は問わない、と言いだしたのもうなづける。いわば苦肉の策でもあったのであろう。

父親は黙って働く姿を見せることで子供に対する教育は十分であると思っていた節がある。働くという面では申し分のない父親であったが、子供との心の繋がりという面では不足していた。しかし、両親の夫婦仲は良好で、父親の優柔不断な態度をA子に指摘された時でも母親は、とくにじれったがるか不満を言うこともなく、「あの人はそういう性格ですから」と肯定的に受け止めている。むしろ父親のよい所を子供たちも早く分かってくれるといい、といった言葉にみられるように、父親の立場を弁護する事さえあった。

そのため兄も遅い反抗期を迎えた時に、両親に対する直接的攻撃はしていない。母親に対する口答えや無視などの他、自分の持ち物にあたる、病気でもないのに学校を欠席するなどで、間接的に攻撃性を表出していた。むしろ、母親のいない時に、A子に陰口を利くなどどちらかといえばソフトな仕方が多かった。A子も優等生の兄の思い掛けない反抗に驚きを見せていた。

この両親の問題は子供に対してのしつけや家庭教育の方針といった根本的な面で、かけていたことである。従ってA子の問題が起きた時に、過去の誤りに気付くのが困難であった。兄と同じしつけであった、といってもそれがどういうしつけであったのか分らないので、それをはっきりさせてから、A子の問題を探るという作業であった。やはり、A子に対しては兄より甘やかしたと気付くのに半年くらいも掛かっている。

欠席が長期化して、A子が来談できなかった第Ⅲ期は母親にとってはまことにつらい時期で

あった。立ち直りについての見通しもたえず、治療にも行けず、家の中でもんもんとして過ごすA子と一緒に一日中いることにはさすがに耐えられず、「以前習ったと同じやりかたの洋裁の先生が近くで勉強のサークルをしているから、私も通いたい。」と週に何日かは外出することになった。それもA子のことを知っている近所の人との交流である。つらい面もあったと思われるが、A子のためには自分がいつでもピッタリ一緒にいない方がいい、との見解を得て必死に堪えて乗り越えている。それからは家でも洋裁をやって気をまぎらせたり、時にはA子の洋服を作ってあげたりしていた。A子はそれを着て来談した時、「お母さんのために着てあげた」と言いながらも満更でもない顔付きであった。親子関係の上ではよかったと思えるし、このことがA子にも物を作るという気持ちを起こさせ、欠席しているうちに母親から洋裁を習っているし、卒業が近くなってきたころには、同じ先生に母親と一緒に習いに行っている。

口べたな母親からA子は手仕事をしながら学ぶ事が多かったのではないかと考えられる。

#### (4) 学校の問題

A子の登校拒否もきっかけについては学校にもその責任はある。中学校の方針が、あまりにも規則で縛りしかも画一的であったことが第一にあげられる。全生徒が必ず何かの部活動に所属しなければならず、一年生は運動部に入らねばならないとなっていた。「体力づくり」が学校のモットーではあっても、小学校ではバスバンド部で活躍していたA子にとってはやはり受け入れ難いものであった。おまけに早朝の練習を休んでも欠席届けを出さなければならず窮屈であった。

A子の一年の担任は若い女性であったが、班活動を奨励して、なんでも班の責任で解決するようにしていた。リーダーがしっかりしていればこの方法もうまく遂行できるのであるが、中学になったばかりのなれない班長はA子のミスをかばうことはせず、皆で批判してしまった。担任はそうした班内の出来事を掌握できず、結局A子は班に押しつぶされてしまったようなものであった。

この担任はA子を励ますつもりで、兄と比較したり、「頭は良いのに出来ないのはあなたの怠け」などの発言でA子の気持ちを逆撫でして、徹底的に嫌われてしまった。

2年と3年の担任は若い男性で実に協力的であった。現金にもA子は担任をあまり避けず、誰にも会いたくないと言いながらも、訪ねてきてくれた担任に会って話ができていた。登校拒否の子供には登校刺激は禁句であるという考えもあるが、登校刺激を与えない時期があったにしても、学校からの誘いも断わるというほどの絶対的なものではない。

A子本人の状態によって嫌がっているものを無理にとはしなかったが、いつも本人に、「会うか」と尋ねてから受け入れた時のみに限定していた。そのことは学校側も承知していて、訪問を諦めたり、母親だけに会って帰ったりで強制はしなかった。

A子は他の登校拒否の子供にありがちな、学校への攻撃とか担任への根強い反発といったものはなく、むしろ早く学校へ行きたいという気持ちが強く、すすんで担任や友達に会っている。「行きたくても行けない、この気持ちを分かってくれたい」と懇願したこともある。その意味では学校側への抵抗は少なかったといえる。

A子が明らかに反発をしたのは、権威主義的な人であり、1年の担任と教頭が筆頭である。A子がせっかく学校へ行っても教室に入れず、校長室にいと、「こんな所にも意味がない、馬鹿でなければ分るだろう」と説教したり、学年主任は冬休み前に、「勉強が遅れているから補習に出なさい」とやっとの思いで登校してきたA子の気持ちを無視した発言をしている。担任は「ゆっくりしたらいい」といつてくれるし、校長も「顔を見せてくれれば出席にしよう」と言ってくれている。登校拒否の生徒の気持ちを理解することができるのは、地位とか年齢にはよらないものであることが実感される。

この中学校は概ね協力的であったので、連絡を取り合って長い欠席にもさほどの混乱もなく耐えてくれていたが、一般にはもっと強圧的に登校を促したり、進級させないといって圧力をかけがちである。この学校でも、教頭は「勉強

が遅れてしまったから、特殊学級がいい」とか「高校へ行きたくれば、養護学校の高等部ならどうか」などと親にも分る間違っただけの情報提供して、あとから担任が訂正するなどの一幕もあった。こうした混乱はよくあることである。

治療施設であるセンターとの連絡調整も電話を中心はかなり頻繁に行われたが、なによりも親の治療に対する態度が積極的であったので、学校側も割合に素直に注文に応じてくれたと思う。

登校拒否を何年も経験しているのに無理しても学校へ通おうと思ったことについて、A子に聞いてみたところ、「登校拒否をした人達の書いた本などに、学校へ行かずに生きるとか、学校を逃避してそんなところへ行かなくてもよい、と行けないのを合理化したものがあるけれども、自分はやっぱり学校は行くべきだ、学校の生活には自分だけの生活では得られない経験が山のようにあると思う。何年遅れても学校は行ってよかったと思う。」と答えた。A子のこの言葉に登校拒否の治療の意義が集約されていると思う。

## § まとめ

思春期登校拒否の事例として、中学校1年の12月から卒業までの相談の経過を紹介した。この事例を取上げたのは、次のような理由である。

- ① 思春期登校拒否の治療では、本人が来談しないことが多いが、この事例ではかなり来談し自分の問題が話されていること。
- ② 親にも本人にもそれほど深い心理的な問題がみられず、普通どこにもある親子と思われ、それだけに現代の子供を持つ家庭に共通した問題を含んでいるということ。
- ③ 学校との関係が、登校拒否にありがちな拒否的なものではなく、接触も絶える事なく続けられ、双方が、お互いの努力を評価していたことが特筆すべき事例であったこと。
- ④ 中学校卒業後5年経って、本人によってその後のことや、登校拒否の経験について語られていること。

A子は兄の卒業と入れ替わりに中学校に入学した。兄より能力的には劣っていた上、努力するタイプではなかったため、中学校の決めた厳しい方針にはついていけず、挫折感をあじわう。中学校の2年生もほとんど欠席した。

次第に自分の問題に気付くことができ、登校しようと努力をしたが、長続きせず、挫折の経験を積むことになった。その間母親はA子を過保護に育てたことに気付き、しつけの方針を立て直す。こうすることで兄も遅まきながら自立へ向かって反抗をみせ始めた。2人の子供に振り回されるような中でも母親は耐えた。その母親をカウンセリングの中で支えることが課題であった。

中学校3年生になっても初めは登校できないが、二学期の終わりからA子は自分の進路を決定し、学校の相談室まで登校できるようになって卒業した。

卒業後進学した専門学校も間もなく欠席し始めた。母親は専門学校は義務教育ではないので、登校できなければ退学も止むをえないと、A子の選択を待つ意味で治療も中断していた。A子は1年留年したところで、やはり学校へは出たいと自分で決めて、登校を始め、無事4年間が経過した。さらにA子は短大卒業の資格が取れる専攻科へ進学することを決めている。

思春期登校拒否は思春期が終わってみなければ立ち直ったかどうかかわからないというが、A子の場合20歳を迎えて、その立ち直りは確認されたといえる。

学校の対応では、登校拒否のきっかけとなった1年の時の指導について、学校全体の問題として話し合われた。A子に対して、2年3年時の担任はA子の気持ちをよく理解しようと努力し、また理解もしてくれていた。学校の体制を決める学校長は途中から交替し、その後は協力的になった。

登校拒否の子供が再登校を始めるときは、どの場合でも学校の協力なしには果たせない。段階を追って無理のない進めかたが望まれるところであるが、それが可能となるためには担任一人の力ではなく、学校側の全面的な協力体制が必要になる。その意味では、学校長の理解が不

可欠となる。A子の場合はその点でも恵まれていたといえる。

引用・参考文献

- 小泉 英二 編著 続登校拒否  
——治療の再検討——  
学事出版社 1980
- 梅垣 弘 登校拒否の子どもたち  
学事出版社 1984
- 稲村 博 思春期挫折症候群 新曜社 1983
- 稲村 博 登校拒否の克服 新曜社 1988
- 小野 修 登校拒否児の成長 黎明書房 1985
- 東山 紘久 母親と教師が直す登校拒否  
創元社 1984
- 菅 佐和子 思春期女性の心理療法 創元社 1988
- 平井 信義 登校拒否児 新曜社 1978
- 詫摩 武俊編 どうしたら立ちなおれるか  
登校拒否 有斐閣選書 1980
- 学校教育相談 特集 再検討！登校拒否  
学事出版社 1989
- 田畑 洋子 思春期登校拒否児の治療過程  
——母親面接を通して——  
名古屋女子大学 紀要 34号 1988
- 名古屋市教育館 教育相談に関する研究  
——登校拒否(3)——  
研究報告5304 1978
- 名古屋市教育センター 教育相談に関する研究  
——登校拒否中学生をめぐる問題——  
研究報告5704 1982
- 名古屋市教育センター 生徒指導に関する研究  
問題を持つ児童生徒への取組みの在り方  
——「登校拒否児童生徒」の指導——  
研究報告6201 1987